

Book Review

評者：寺岡征太郎 帝京大学医療技術学部看護学科精神看護学

東大医学部生が受けている ダイバーシティ&インクルージョンの授業

「建前」から「納得」へ 11人の講義動画付き

編：笠井清登、熊谷晋一郎／発行：医学書院

定価：2750円（本体2500円＋税10％）



この大事な「居心地の悪さ」

ダイバーシティやインクルージョンという言葉自体は、ずいぶん身近なものになったように感じる。一方で、その意味を深く理解し、適切に使えている感覚は持てずにいた。そんななかで本書に出会った。

私が担当する精神看護学の授業では、精神障害のある当事者の方々をゲストスピーカーとしてお招きし、学生との対話や交流の機会をつくってきた。リアクションペーパーからは、多くの学生が自分のなかの偏見を再認識したり、当事者からのメッセージに励まされたりする様子を読み取れた。協力してくださる当事者の方々からも、語ることで自身のリカバリーを感じたという感想を聞く。この授業の展開には意味があると思ってきたし、今もそれを否定するつもりはない。ところが読み進めるうちに、この授業のことが何度も頭に浮かび、思い出たびに少し居心地が悪くなった。

山口創生氏の講義では、当事者との接触体験がスティグマ低減に有効である一方、それだけで解決するわけではないと語られる。効果的な方法を探すなかで、そのヒントは共同創造にあるかもしれないと山口氏はいふ。この話は、これまでの授業を肯定してくれるようでもあり、その先を問われているようにも感じた。「共同創造」とは実際にはどういうことなのだろう。教員と当事者、専門職と当事者のあいだにある非対称性を自覚しながら、「共に創る」ことをどう展開していけ

るのだろうか。

障害者運動で掲げられてきた「Nothing About Us Without Us（私たちのことを、私たち抜きに決めないで）」を冠した熊谷晋一郎氏の講義に触れたとき、「当事者について教える」「当事者から学ぶ」「当事者と共に教育をつくる」……似ているようでまったく異なる3つの関わり方が頭に浮かんた。自分が今どの立場にいるのか、そもそも「立場」を考えること自体どうなのか、と繰り返し考えさせられた。

当事者のナラティブは、私自身のこれまでの看護実践も呼び戻した。自分がよい支援だと思ってやっていたことのなかに、専門職としての価値観を「本人のため」という言葉で押しつけていた部分はなかったか。当時の自分なりに考えて動いていたことを、ほんの少し後ろめたさを覚えながら読み進めたのも事実である。

本書から受けた刺激を、今後の授業につなげていきたいと思う。本書にはQRコードで見られる講義動画だけでなく、「やってみようグループワーク」というコーナーもある。正解を教える教材としてではなく、学生が自分のなかの思い込みや引っかかりに気づき、それを誰かと言葉にしてみるきっかけになる授業づくりのヒントとして魅力的である。

本書を読んで残ったのは、D&Iについて詳しく理解できてよかったという安心感ではない。自分事として考える必要性を知りながらも、どこかで自身をその問の外側に置いていたのかもしれない。そう気づかされた居心地の悪さを、これからも手放さずにいたい。